

京鹿子

本誌創刊二十一年一月發行
本誌一八七九年一月創刊

1月号

京鹿子祭特集号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十八



木枯の棲む最果ての番外地
碁盤目を遊ぶ木枯し路地の黙
蹲に鳥の戯れ石路あかり
離れより夫の呼ぶこゑ石路の朝
立冬の大坂城に陣の光ゲ
煤逃の身に覚えなき雑事メモ

綿虫の影を踏ませぬ大手門
冬蜂の浮かぶ瀬のなき浮き世かな
枯木立粗忽からすの見え飾る
冬の月光ゲ揺り椅子の揺れ止まず
後日祭
冬鴟の二の足を踏む天守跡
懇ろに冬蝶招く白書院

貞徳忌俳句大会

先走る木の葉いちまい雨もよひ
上枝より雨は夢いろ冬紅葉

近詠

和田 照海



露葎

真四角に乾くシートツや一葉忌
渡り蝶海の碧さを一縷とす
ゆく秋や嵯峨野泊りといふ静寂
火葬ぼたん押せば応へて冬隣
さりながら生死の綾や露葎

近詠

松本 鷹根



粥柱

院望の樹間に街を寒晒す
対岸は入日に続く枯れ芒
粥柱ほどの自負にて老い込めず
寒林の雨滴に余生見透せる
寒の水呑み敏捷な鳥となる



尾花の風

三尊にまみゆ尾花の風と来て
石庭や海原凧ぎてこそ平和
天高し大師和顔の眼光に
雲龍凶秋天へいま吼ゆるかに
五重の塔選り好みして燕去ぬ

英華採集

野分雲終章の波あといくつ
今では衛星写真等により台風の発生状況そしてこれからの進路を我久は凡そ知ることが出来るが、台風の本体が分からない昔の人には、ただの吹き荒れる風でありそれが野分である。掲句は、その怪しげな野分の雲が暗雲を漂わせている中、脳裏にふと浮かんでくる終章の波に余生を慮る作者がそこに居る。下五の「あといくつ」にますます不安が渦を巻いているのではないか。季語の「野分雲」が作者の心理をついている。

現世の台本を這うちちろ蟲

福山藤井杏愛

ちちろ蟲とは蟋蟀のこと。秋の夜鳴く虫の中でもっとも親しまれている。鳴き声も感傷をそそる鳴き方は人に優しく秋の夜長を楽しませてくれて心を和ませる人も多いだろう。現世の台本とは何か？それは人それぞれの人生を神様が書いた台本と見ると納得できる。人は台本通りに生きていて、とすれば現実に見えない台本に踊らされていることになる。しかし、ちちろ蟲には見える台本を這っている。後は、読み手が季語と重ねてどう読むかである。

猫じやらし持ち手を返す別れ際

京都荒木加代子

猫じやらしは、猫がじやれることから俗称とされている。掲句は、どこか公園にでも家族で遊びに出かけたのであろう。偶然見つけた猫じやらしに悪戯ところが芽生え一本刈り取ったもの。遊びのお相手は乳母車に乗った幼い子（孫）に違いない。盛んに幼い子の首筋に猫じやらしを当て、こそばして面白がっている。幼い子も笑い興じている。楽しい時間を過ごし帰る際にその猫じやらしを渡してやる作者。中七の措辞が幼い子への愛情に溢れている。

筆 始 沼田巴字

白梅やしべ高々の翁ぶり
夢に生き夢に死す身よ石路の花
風花や母の涙のありし時
くはへたる藁しべ大事寒鴉
仰ぎ見る野風呂の軸や筆始

年迎ふ 北川孝子

新春の胸の真中にともるもの
白菜の緊まりゆく夜のひとりごと
なほ生くる齡愛しく年迎ふ
年迎ふ新春の泪のひとしづく
水仙の微動だにせず呼吸せり

初御空 植村蘇星

青 柿 直江裕子

めでたさや昭和一桁初明り
産土の土の匂ひや初日の出
初御空丹波連山見直せり
相応に一日一善年新た
先哲の戒めこれあり年新た

夢での死告げずに秋の野に遊ぶ
痒みをば痛みに変へてほととぎす
青柿のとつぜん無数老いました
乱歩めく黒猫のゐる曼珠沙華
大輪の菊に時代のそつぽ向く

水引草 高木晶子

左 貌 奥田筆子

蟬の穴通つて咲くは曼珠沙華
結束の堅き葡萄よ敬老日
摘果後の枝跳ねてゐる台風裡
チューリップ植糸天空とりとめなし
水引草時々晴の最終章

左貌の子規しか知らず青瓢
海に霧名もなき小魚串に反り
生み落とすどんぐり棄けとも祈りとも
ジュース以上ワイン未然や村興し
朝寒やバブルと見栄詰めゴミ袋

まだ明るくて 伊藤希眸

花 布 井上菜摘子

薔薇散りぬ人の心を爛れさせ
幾たびの獅大根に箸置かれ
霜月の陽はまだ明るくて嬰泣けり
枯れきれぬ山を歩きぬ卒寿かな
ふらここに冬着の己れ乗せて漕ぐ

花布はなぬいの藍しんと雪が降る
鳥獣の気配ふつくら初山河
セーターのタートルネック君にこそ
ハンドルのあそびのやうな日向ぼこ
人生じんせいに木生きせいに雪ふりしきる

神麓集

母の窓 村田あを衣

表裏なき風は一重や萩真白
紅小萩小さき約束小声にて
萩揺るるルビふるごとく秋の蝶
初しぐれ山河の地図を濡らしけり
月今宵磨いておきぬ母の窓

燕去ぬ 山中志津子

風よ風萩の本音を聞かせてよ
しばらくはそのままにおく虫の闇
銅鐸の語る王国木の実降る
海峡の向かうは任那鶴渡る
戦場と反対に向き燕去ぬ

大 旦 井尻妙子

まつ先にははのこ糸して大旦
グラビアの海老蔵と酌む年の酒
ひとり居の探しものして三日かな
足りぬものひいふう三つ七日粥
背凭れの高き揺り椅子女正月

たまゆらの 鷺山珀眉

椋鳥の徒党夕日の空半分
たまゆらの萩蝶濁音を持たず
夜叉となるつもり更更薄紅葉
みせばやの酔ひたしかむる耳飾り
木の実晴れ山のホテルの同窓会

生身魂 亀井福恵

心眼といふも貫禄生身魂
雁渡しこの身に時の経つつあり
曼珠沙華異形のさまに濃かりけり
誰には訛で返す榎植の実
せせらぎに序破急のありぬのこづち

鬼あそび 菊池和子

紅萩の奔放にゆれ愛される
たまゆらの刻を抱きしめ秋惜しむ
星飛んで眼裏におく望郷よ
一塊の光となるや渡り鳥
破目はづす風の蓑虫鬼あそび

野辺の風 西村白杼

野辺の風散り方知らぬ曼珠沙華
落暉して父母のかげ秋惜しむ
椋鳥の百ゐて空の傾けり
禅寺や水引草の白極む
風あらば風と遊びぬ残り萩

秋のこ糸 安田優歌

磨ききる玻璃に歳月秋のこ糸
一病の七分の快気青れもん
露けしやゆび先にくる妣のこ糸
秋声の色なき彩や妣の声
古伊万里の一輪挿しや秋の声

雁のこゑ 本郷 公子

蝶 番 佐藤 千恵

雁のこゑ永久に湧き出づ御神水
萩明り母の縫ひ目の細やかに
ビル翳の淡き人影秋惜しむ
ふるさとを語らぬ毬藻銀河濃し
白秋や存念消ゆる空の青

潮騒のリズムで増ゆる鯛雲
もどりきて何ぞ伝へむ秋の蝶
五目飯大きく握り秋高し
十六夜やかすかに軋む蝶番
上座下座心して座す菊脛

風の私語 石原 孝人

鎌一閃蝗乱るる棚田かな
青空を揺らす黄落風の私語
椋鳥の落暉巻き込むうねりかな
やや傾ぐ稲架を支へし落暉かな
秋惜しむ水音軽ろき棚田道



京鹿子大賞受賞作品

京都市

山田 和

袋掛鳥取砂丘眠りをり	鳥渡る煙の絶えし香時計
鐘一撞楠八百年の梅雨深し	花蕎麦や一揆の村の笑ひ仏
剥落の螺鈿の厨子や沙羅の花	墨涸ぶ利休の尺牘冬椿
蝉しぐれ寄添ふ低き無縁塚	小面の母のまなざし雪椿
翳を曳く青蜥蜴かな落城址	墨蹟の残る木簡笛子鳴く
廃屋のベンガラ格子花木槿	青竹を結ぶ黒縄雪解風
梅雨神のはち切れさうな雨袋	笹鳴きや罅跡残す登り窯
すがれ虫病衣の細き紐結ぶ	春雷や海より龍の跳ね出づる
薄紅葉女人堂へのゆるき磴	棕櫚縄の男結びや垣繕ふ
門跡の「夢」の書の褪せ薄紅葉	霾るや蛤御門の弾の跡

花洛賞

京都市 大西逸子

緑蔭のふたつの木椅子君を待つ
御仏のかそけき吐息沙羅散華
梅雨茜寺小屋あとの明かり窓
藻畳にかくれし魚影遠き雷
杉戸絵のうすれし翳や半夏雨
蟪蛄の古墳色して西に向く
ひよんの笛吹いて故郷を引きよする
思ひ出を啄む鷺や水の秋

鰯雲傾ぎて戻る漁舟
小春日や老いし神馬の退任式
枯れつくすパスカルの葦世は混沌
無人駅に降りたちし霧寒の月
日脚伸ぶ自分探しの旅靴
水底にさざ波走る桜東風
ゆすらうめ幼なの夢は揺れてゐる

青秀賞

福山市 村上禎女

黄泉へ夫常世にひとり白桜忌
星空と潮騒の香と籐寝椅子
原爆忌オバマの鶴よ常しなへ
現世は騒騒しいか蟬の穴
桐下駄の鼻緒ゆるめて初浴衣
秋簾小恙ひとつ持つ余生
夫逝きてにはか信徒に素秋かな
全身全霊委ねてをりぬ日向ぼこ

しまひ湯に余命をあづけ除夜の鐘
何もかも加齢ですまし年暮るる
鯛焼をひとつと言へず二つ買ふ
人に性善説薔薇に棘のあり
春雷やひとり居の背に遺影の目
行間をはみ出す詩歌西行忌
ひとり居の三猿ぐらし花は葉に

募集大作賞

福山市

石井一石

隠れ里

雪解水渡りて目覚む祖谷の峡
急峻な畑の傾りや蕎麦の花
後戻りできぬ吊橋青しぐれ
貧厨の夜なべに祖谷の粉ひき歌
たかななを猪と分ちて峡暮し
かなかなや柚の阿吶の呼吸とも
五月雨や溪轟かす暴れ川
敗走の途千仞人の溪紅葉
八重葎落ちゆく野辺の道祖神
草屋のもてなすものに黍の餅
幼帝の御陵伝説青葉闇
炭焼の煙一筋隠れ里
名を消して眠る伏せ墓苔の花
落人の里懐に山眠る



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

尊顔に弔辞をたたむ秋のこゑ

堺 寺岡 直美

潜り戸を開ける師の影秋の苑

師を待つは神苑の木々秋気澄む

大門の紅葉待たずに師の逝かる

師の文の清き流れや萩月夜

帽子花無名女優の化粧台

高 槻 杉井真由美

秋暑し逆上がりまだできぬまま

霧を抱くあれは片恋だったかと

余熱まだ隠し持つてる紅の萩

地ずり萩鼻緒に残す記憶かな

福 山 林 すみ

居たひとが何処にも居ない秋の空
秋灯や待つといふことまうあらず
何もせぬ秋の夜長の長さかな
享年は人にそれぞれ草の花
良き顔であたいと思ふ秋日かな

スニカー馴じむ道程秋惜しむ

福知山 松山 潤子

東屋の風の息継ぎ秋惜しむ

現世の台本を遭うちちろ蟲
独白の声の掠れや後の月

福山 藤井 杏愛

椋鳥の群れて大空重くなる

身に入むや台本なしに上がる幕
秋櫻昔のままの岐路に立つ

終りてふ始まりありし大刈田

一鳴きに一息の黙虫の闇

長き夜や逢ひたき人はみな遠く
猫じやらし持ち手を返す別れ際

少年の失恋日記青みかん

京 都 大西 逸子

恭しく団子も盛るや芋名月

京 都 荒木加代子

うたかたの遠き日の恋白芙蓉

萩白しフリフリ襟の友が逝く

水分りの風の強か葛なだる

荷を解く重み十キロ林檎愛

七転びくわりんの傷を撫でる風

虫すだく一人の夜道守られて

秋の日の匂ふ子の髪抱きあげる

野分雲終章の波あといくつ

京 都 山本 正

耳門にも門をかけ夕野分

冷蔵庫の娘のメモや今朝の秋
野分あと山の祠の地藏様

アリソナ 伊吹 之博

ぶらり寄る前衛画展うろこ雲

鬼やんま藪から棒のツーリング

目配りをあなたこなたへ赤とんぼ

子ら集い料理談義の長き夜
秋の宵息子と交わす中ジョッキ